

「サルサはキューバの音楽ではない」

♪ハバナからニューヨークへ♪

キューバの代表的な音楽ソンとの間の関係とその違いを明確にしていきたいと思う。

1、キューバ人が「私たちの音楽はソンだ！」と主張する理由

外国语学部 スペイン語学科4年 畑山 敦子

はじめに

「ラテンといえばサルサ、サルサといえばキューバ」と多くの人が常識としている。サルサは踊りやすいリズムとテンポや、明るいサウンドが人々に受け入れられ、日本でも人気があるミュージックのひとつである。

しかしある時、驚くようなことを聞いた。昨年、在日キューバ大使館の方にお話をうかがう機会があった。その時そのキューバ人男性は「サルサはキューバのものではない。ソンこそ、キューバ人の愛する音楽だ」と言っていた。それ以来、なぜキューバの人がサルサを否定するのか疑問に感じた。

キューバンサルサといわれているサルサは日本でのCD店でもコーナーが設けられているほど一つの音楽ジャンルとして定着している。にも

かかわらず、当のキューバではサルサを自分たちの音楽ではないと考えている人が多くいる。

私の論文のテーマはこの一つの疑問から始ました。昨年の夏、実際にキューバへ行った時、どのCD店にも何千枚とサルサのCDが置いてあった。ますますキューバとサルサの関係について疑問がわいた。

調べてみると、サルサが初めて演奏されたのはキューバではなかった。またサルサは様々な音楽の影響を受けて今の形になっていた。サルサがキューバ産ではなく、キューバ人以外の人々によって育まれた音楽であるとすればそれはキューバの音楽ではないといえるのではないだろうか。そこでキューバ音楽とサルサそれぞれの成り立ちに着目し、サルサがキューバで形成された音楽ではないこと、第二にサルサと

1 キューバ音楽の成り立ち（前半）

【原始～一九世紀】

最初に音楽をキューバへ持ち込んだのは、アフリカからスペイン人によって連れてこられた黒人奴隸たちであった。もともとキューバには農耕を営む穏やかなタイノ族やシボネイ族などの先住民が住んでいた。しかし一四九二年にスペインのイザベル女王の援助を受けコロンブスがキューバ島に上陸し、一五一一年にはベラスケス率いる遠征隊によって征服された。スペイン人は先住民をほぼ皆殺しにした。疫病や飢饉のせいもあり、先住民は絶滅に追いやられた。その後、スペイン人たちが新たな労働力として連行してきたのが黒人奴隸たちであった。

その後キューバは一九〇二年まで約4世紀もの間スペイン人によって支配された。スペインから来たヨーロッパ系の白人とアフリカからの黒人たちが共に暮らし、その間で子どもが生まれた。

その後キューバは一九〇二年まで約4世紀もの間スペイン人によって支配された。スペインから来たヨーロッパ系の白人とアフリカからの黒人たちが共に暮らし、その間で子どもが生まれた。

れ、だんだんキューバは混血社会となつていった。音楽も二つの異なる文化の出会いによつて生まれた。こうした白人と黒人の混血していける特殊な人種構成によつて生まれたのがキューバ音楽のルーツである。

また、ハイチというキューバの東方に位置する島(現在のハイチ共和国)はキューバと同じくクリストファー・コロンブスによって発見された。スペインに植民地化された。一六九七年のライ

スバイク条約により、島の西側三分の一はフランスの領土となつた。フランスによる支配を受けていたので、文化もフランスから伝わった。そのためハイチに近いキューバ東部、つまり今

のサンティアゴ・デ・クーバにはハイチからの

フランス文化が入り込んだ。こうしてキューバ

の文化は複数のルーツの下で発展した。

キューバの民衆の間で昔から音楽が盛んになつていつたのは一八世紀後半からだ。キューバを支配していたスペイン人の音楽というのは、ヨーロッパから伝わったクラシックなどの優雅な曲、ダンスマジックだった。そこに黒人たちのはねるようなアフリカのリズムが加わり、キューバ音楽の融合が始まる。四拍子の中の最後の一拍の部分にわざとビートを入れず、四分の三拍子のような不思議なリズムがう

まれた。一九世紀前半から半ばにかけてこの独特のはねるようなリズムが、ハバナで踊りの音楽として流行する。これが「ハバナの踊り」「アバネーラ」(=Habanera)である。

この少し前、世界初のヒット曲といわれている曲がキューバの音楽を元に生まれる。スペイン人の作曲家セバスティアン・イラディエール(一八〇九～一八六五)が「ラパローマ」という曲を発表した。この曲はスペインのマドリー

ド発だが、リズムは先ほど出てきたアバネーラのリズムをもつ。最初は人から人へと噂が広ま

り、一九〇二年に米国でレコードが初めて商品化されてから、「ラパローマ」は世界各国の楽団や歌手によって録音され、発売されるようになつた。

同じく黒人が奴隸として移り住んでいたアメリカでは、黒人たちのリズムや音楽は注目されずに消えていった。黒人の音楽が受け入れられたキューバとアメリカの違いは何だったのであろうか。キューバでも黒人たちは奴隸という立場にありながら、音楽においては彼らの方がヨーロッパ音楽を取り込み、自分たちのものにしていた。その例がルンバである。ルンバは今ではほかの国の音楽も含めた広い範囲で音楽のジャンルの一つになつていて、最初はハバナ

市街の黒人コミュニティーの間で踊りの音楽として演奏されていた。アフリカで神々に捧げるサンテリアなどの黒人宗教音楽から派生したこの郷土娯楽音楽は、休日、誕生日、結婚式など様々なパーティで踊る時に使われていた。キューバン・ルンバ(CubanRumba)とも呼ばれる。

2 「キューバ音楽」ソンの形成

こうしてキューバでは黒人のリズムに白人のヨーロッパ音楽が混ざり合うというほかでは見られない音楽発展の道をたどった。一九一〇年代から、音楽はさらに完全な融合の形になつた。それが「ソン」(Son)である。アバネーラは白人が黒人のリズムを取り入れてつくった音楽、ルンバは黒人が「スペインらしい」メロディーを加えて作りあげたものだつた。しかし、ソンはどちらの音楽も対等なバランスでベースとなつた音楽だ。混血社会の中で出会つた二つの音楽が一つになつた「キューバ音楽」なのである。ソンはアフリカの踊りの影響を受けているため、キューバン・ルンバと同じようにダンス音楽だ。身体全体で音楽を楽しめるこのノリのよさが、キューバ全体で人気を得る要因だつたのではないかと推察される。

ソンの特徴は、前半部分がヨーロッパ的なメロディーの主題部分を持ち、モントウーノと呼ばれる後半のパート部分の繰り返しがアフリカのリズムを元にしていることだ。この繰り返しの部分を演奏者は自由に表現できる。この演奏の自由さがアフリカ音楽の伝統を受け継ぐ部分である。ソンの基本的な演奏楽器の構成はトレス（小型のギター）、普通のギター、ベース、マラカス、リズム担当のクラーベス（棒でできた小さな拍子木）、ボンゴ（小さなタイコ二つ）でそれぞれ一人ずつが担当した。このうちの一人が歌い手をつとめ、バンドとなる。この六人の構成をスペイン語の「六人組」（＝セスティト）からとつて、セステート・アバネーロという名のグループが生まれた。彼らは最初キュー東部でスペイン伝統の音楽を演奏していたが、ハバナにやつてきてからはキューバン・ルンバのアフリカの部分を受け入れてさらに音楽の融合に力を入れた。ソンの最もポピュラーなバンドである。

3、世界に広まる 「キューバ音楽史 後半」

【一九五九年 キューバ革命】

一九二〇年代に入つて、この六人組にトランペットが加わるようになり、ソンのバンドは

トゥー・チャチャチャ」という曲が世界中でヒットする。また一九五九年のキューバ革命直前に流行ったパチヤンガは、キューバ系アメリカ人のソングライター、エドゥアルド・ダビッドソンがチャヤチャよりも自由でファンキーなリズムのダンスミュージックとして生み出した。パチヤンガは革命に熱くなつていた当時のキューバ人の若者に歓迎された。その後一九六一年に彼はアメリカに渡り、パチヤンガはニューヨークでも人気を博した。プエルトリコやドミニカ共和国からの移民たちが活発に演奏した。キューバだけの人気だつた音楽も、アメリカへ渡つた後にヒットした。この二例はサルサが生まれる少し前から、すでにキューバ音楽が国外輸出され、注目されていたことを示している。（一〇ページ表一「キューバ音楽が世界に広まつた例」参照）

4、革命後に受け継がれている音楽

革命後のキューバでもミュージシャンたちの音楽活動は続けられていた。世界に広まるような音楽は生まれなかつたものの、革命前までのソンやチャチャチャなどの音楽は受け継がれていた。九〇年代になつてそれらが一気に注目さ

「七人組の」（＝セプテート）のセプテート・アバネーロが多数となる。ソンから生まれた最大のヒット曲、「南京豆売り」（ドン・アスピアス樂團）は一九三〇年代に生まれた。この曲は米国を始めとして世界中でヒットとなつた。ピーナツ売りの呼び声を元に作られたが、最初はソントして演奏されていた。しかしアメリカではルンバと呼ばれ、本来のキューバン・ルンバとは全く違うにも関わらず、「ルンバ」の音樂ジャンルとして浸透した。これらはボールルーム・ルンバとも呼ばれた。現在では混亂を避けたため、キューバン・ルンバを「Rumba」、ボールルーム・ルンバを「Rhumba」と表記することが多い。

この「南京豆売り」のヒットを皮切りに、キューバ音楽は米国や世界にブームを巻き起こしていく。五〇年代ではキューバ音楽といえばマンボ、といわれるほどマンボが世界中で大々的にヒットした。ルンバの他にも「ボレロ」というダンス音楽もキューバから発信され、流行した。

キューバのミュージシャンたちは次々とアメリカで活躍を始めるようになる。彼らはハバナから片道切符でNYにやつてきて、スペニッシュ・ハーレムや、ブルックリンやブロンクス

れたのが「ブエナビスタソシアルクラブ」だ。一九九六年にキューバの老ミュージシャンたちを集めめてセッションを行い、それを米国人の有名ギタリスト、ライ・クーダー氏がまとめCD化した。それまであまり注目されていなかつたキューバ音楽の味わい深さ、すばらしさが世界中に受け入れられ、「ブエナビスター」は一九九七年のグラミー賞を受賞した。その2年後には彼らの活動を追つたドキュメンタリーがヴィム・ベンダース監督によって映画化され、さらなるブームとなつた。

「ブエナビスタソシアルクラブ」とは、メンバーのうち多くが革命前の一九二〇年代に在籍していた会員制高級音楽クラブのことと、その名を取つたグループ名である。キューバ音楽が最も活発に楽しんでいた頃の名残からつけられたのだろうか。

彼らが演奏しているのはキューバ音楽の黄金時代の名曲ばかりだ。それはサルサとは全く別の音楽である。彼らの中には革命後も音楽活動を続けていた人もいれば、音楽とは無縁の生活をしており無名だつた人もいる。最近（一〇〇六年三月）亡くなつたブエナビスタのメンバーの一人、ピオ・レイバはファハルド樂團という有名なバンドで活躍し、ソンのリズムを極めた

のラティーノたちのコミュニティーに移り住んだ。ハーレムの南にあつたスペニッシュ・ハーレムには、一九二〇年代ごろからブエルトリオ（El barrio II地区）と呼ばれていた。そこにキューバ人のミュージシャンたちが住みついた。彼らはナイトクラブやダンスホール、ホテルのボールルーム、深夜営業のバーなどで演奏活動をして人気を博した。有名なのは、チャランガ樂團というバンドだ。彼らは一九五八年にニユーヨーク中のクラブを渡り歩いてライブを行つた。コロンビアレコードとビクターレコードという二つのレコード会社（その当時は蓄音会社）の発展もあり、次々とキューバ人ミュージシャンがレコードを出した。

キューバ音楽がニユーヨークを発端にアメリカから世界へと広がつた主な例として、次の二つが挙げられる。「チャチャチャ」と「パチャチャ」だ。チャチャチャはヨーロッパ的な要素の強いダンス音楽だ。キューバのあるバンドを脱退した二人のバイオリニストが一九四八年に新たなジャンルを確立したのが始まりである。

チャチャチャはキューバでは一九三〇年代に流行した。その後、アメリカの曲をチャチャチャでアレンジした「ティニー・フォード」

一九六四年、ペルトリコ人ニューヨーカーのフルート奏者ジョニー・パチエーコがラテン・ミュージック専門の「ファニア・レーベル」を仲間と立ち上げた。その後彼は、キューバ音楽がニューヨークで受け入れるために、変化を遂げさせる重要な役割を果たす。パチエーコとセリア・クルスのファーストアルバム「セリア&ジョニー」(一九七四年)はラテン音楽を知らないなかった上流社会にも新たなミュージックとして受け入れられた。彼らが持ち込んだソング、ダンソン(ソングと同時期に生まれたヨーロッパの影響の強いダンス音楽。チャランガというバイオリン、フルートなどのバンド編成が特徴)などキューバ音楽はエキゾチック・ミュージックとして注目を浴びた。

ここで忘れてはならないのがペルトリコ人の存在である。ペルトリコは米国の属国として政治的に支配されている。一九五二年にアメリカの自治領となつてからも、本土の国民とは差別される不遇の時代を送つていた。一方、古くから文化の面では近くのラテンアメリカの伝統を多く引き継いでいる。島の住民のほとんどはスペイン語しか話さない。キューバ音楽も早くから伝わっていた。一九六〇年代以前もニューヨークでキューバ音楽をやるミュージ

シャンは多くいた。ペルトリコ人の優れたミュージシャンも多数輩出された。その一人、コトセリア・クルス(一九七四年)はラテン音楽を知らなかつた上流社会にも新たなミュージックとして受け入れられた。彼らが持ち込んだソング、ダンソン(ソングと同時期に生まれたヨーロッパの影響の強いダンス音楽。チャランガというバイオリン、フルートなどのバンド編成が特徴)などキューバ音楽はエキゾチック・ミュージックとして注目を浴びた。

一九六〇年代の公民権運動の後、移民を規制する動きがなくなり、当時何十万人ものペルトリコ人がニューヨークへ移り住んでいた。彼らはリカンがニューヨークへ移り住んでいた。彼らの音楽もルーツはキューバ音楽である。キューバから亡命したミュージシャンたちと彼らペルトリコ人によってニューヨークにキューバ音楽が持ち込まれた。特にペルトリコ系のミュージシャンたちはキューバのソングを演奏し、ニューヨークのミュージック・シーンの中に心で流行らせた。中でもディット・ペインテはキューバ人のセリア・クルスと共に絶大な人気を誇つた。

2. ソンと様々な音楽の融合

ソングやその他のキューバ音楽は変化を遂げる。ニューヨークにはさまざまな故郷からやつてきた人々の音楽で溢れていたのだ。

ニューヨークは最初から移民のるつぼだ。氷河期の氷が溶けてヨーロッパから民が移動して

バ音楽とこれらの音楽の融合はまるでサルサ(ソース)のように「ぢぢや混ぜ」な音楽だと言われた。言い出した人物には諸説あるが、ニューヨークのストリート・ミュージック誌「Latin NY」の雑誌編集長が七〇年代後半に彼らの音楽を「Salsa」(サルサ・ソース)と表現したという説がある。こうしてサルサ音楽がニューヨークで生まれた。「命したキューバ人、ペルトリコ人などのラティーノスだけでなくアメリカ人もその魅力にとりつかれた。

3. サルサ普及期(一九七〇年代)

それから七〇年代にかけて、サルサはピーチを迎える。ニューヨークからアルゼンチン、ペルー、ヨーロッパ、そして日本にも広まつた。七〇年代後半から八〇年代にかけては、サルサは歌謡曲的な要素が強くなる。甘いメロディーのサルサ・ロマンティカやサルサ・エロティカがそうだ。この二つはそれまでのサルサをより若者にうける音楽にしようとしてペルトリコ人ミュージシャンたちがアレンジした。サルサ・ロマンティカは恋愛をテーマにした曲ばかりで、現在のポップスのラブソングの前身のようなものである。一方スタンダードなサルサのリズムを極めた熟練バンドも生き残つた。しかし

4. コロンビアでもサルサ?

サルサはニューヨークにとどまらず、海を超えてアレンジされていった。ラテンの国々の中でニューヨーク発のサルサがもつとも熱狂的に受け入れられたのがコロンビアだ。コロンビアには「ケンビア」という民族舞踊がある。独立戦争時代に、あるバンドがタイコやガイタ(竹

シャンは多くのヒット曲を世に送り出した。一九六〇年代の公民権運動の後、移民を規制する動きがなくなり、当時何十万人ものペルトリコ人がニューヨークへ移り住んでいた。彼らはリカンがニューヨークへ移り住んでいた。彼らの音楽もルーツはキューバ音楽である。キューバから亡命したミュージシャンたちと彼らペルトリコ人によってニューヨークにキューバ音楽が持ち込まれた。特にペルトリコ系のミュージシャンたちはキューバのソングを演奏し、ニューヨークのミュージック・シーンの中に心で流行らせた。中でもディット・ペインテはキューバ人のセリア・クルスと共に絶大な人気を誇つた。

2. ソンと様々な音楽の融合

ソングやその他のキューバ音楽は変化を遂げる。ニューヨークにはさまざまな故郷からやつてきた人々の音楽で溢れていたのだ。

ニューヨークは最初から移民のるつぼだ。氷河期の氷が溶けてヨーロッパから民が移動して

サルサはこの時が黄金時代だったが、若者は次第にラテンのリズムをもととしたサルサを古臭いと感じたのか、より雑種性の強いメレンゲを受けたペルトリコ人ミュージシャンの影響が大きい。「サルサもキューバの音楽」と見る人が多いのではないか。また流行を取り入れる意味で、キューバでサルサを演奏していたミュージシャンたちも少なくない。それらがCD化され、キューバ発の音楽として世界に発信された。これらが「キューバン・サルサ」のイメージをつくる要因となつたと推測される。

3. サルサが生まれた背景

一九六八年にニューヨークから来たピアニスト、リッチー・レイと歌手ボビー・クルースの

サルサコンビが最初にコロンビアの首都ボゴタでサルサを流行らせた。その後何百もあるクラブ・バンドが若者の間で人気のあつたサルサのアレンジを取り入れ、新たな「サルサ」が生まれた。サルサがニューヨークで流行した七〇年代と同時にコロンビアでも人気を博した。そのためコロンビア人にはサルサは自分たちの音楽だという自負がある。

1. ソンのルーツ

ソングは異なる音楽同士の融合からできた音楽である。白人のヨーロッパの音楽と黒人のアフリカン・ミュージックが互いの文化を受け入れ合い、今のかたちが生まれた。これはキューバで奴隸の身分であつた黒人の音楽が認められたことが大きい。差別されていた存在と考えられ

シャンは多くいた。ペルトリコ人の優れたミュージシャンも多数輩出された。その一人、コトセリア・クルス(一九七四年)はラテン音楽を知らなかつた上流社会にも新たなミュージックとして受け入れられた。彼らが持ち込んだソング、ダンソン(ソングと同時期に生まれたヨーロッパの影響の強いダンス音楽。チャランガというバイオリン、フルートなどのバンド編成が特徴)などキューバ音楽はエキゾチック・ミュージックとして注目を浴びた。

一九六〇年代の公民権運動の後、移民を規制する動きがなくなり、当時何十万人ものペルトリコ人がニューヨークへ移り住んでいた。彼らはリカンがニューヨークへ移り住んでいた。彼らの音楽もルーツはキューバ音楽である。キューバから亡命したミュージシャンたちと彼らペルトリコ人によってニューヨークにキューバ音楽が持ち込まれた。特にペルトリコ系のミュージシャンたちはキューバのソングを演奏し、ニューヨークのミュージック・シーンの中に心で流行らせた。中でもディット・ペインテはキューバ人のセリア・クルスと共に絶大な人気を誇つた。

一九六〇年代の公民権運動の後、移民を規制する動きがなくなり、当時何十万人ものペルトリコ人がニューヨークへ移り住んでいた。彼らはリカンがニューヨークへ移り住んでいた。彼らの音楽もルーツはキューバ音楽である。キューバから亡命したミュージシャンたちと彼らペルトリコ人によってニューヨークにキューバ音楽が持ち込まれた。特にペルトリコ系のミュージシャンたちはキューバのソングを演奏し、ニューヨークのミュージック・シーンの中に心で流行らせた。中でもディット・ペインテはキューバ人のセリア・クルスと共に絶大な人気を誇つた。

一九六〇年代の公民権運動の後、移民を規制する動きがなくなり、当時何十万人ものペルトリコ人がニューヨークへ移り住んでいた。彼らはリカンがニューヨークへ移り住んでいた。彼らの音楽もルーツはキューバ音楽である。キューバから亡命したミュージシャンたちと彼らペルトリコ人によってニューヨークにキューバ音楽が持ち込まれた。特にペルトリコ系のミュージシャンたちはキューバのソングを演奏し、ニューヨークのミュージック・シーンの中に心で流行らせた。中でもディット・ペインテはキューバ人のセリア・クルスと共に絶大な人気を誇つた。

一九六〇年代の公民権運動の後、移民を規制する動きがなくなり、当時何十万人ものペルトリコ人がニューヨークへ移り住んでいた。彼らはリカンがニューヨークへ移り住んでいた。彼らの音楽もルーツはキューバ音楽である。キューバから亡命したミュージシャンたちと彼らペルトリコ人によってニューヨークにキューバ音楽が持ち込まれた。特にペルトリコ系のミュージシャンたちはキューバのソングを演奏し、ニューヨークのミュージック・シーンの中に心で流行らせた。中でもディット・ペインテはキューバ人のセリア・クルスと共に絶大な人気を誇つた。

ていた奴隸たちはキューバでは独自のコミュニティーを築き、独自の文化を大事にすることができた。同時に彼らは、「いいものは取り入れる」柔軟な姿勢の持ち主でもあった。そのため黒人、白人の音楽のそれぞれの利点が活かされ融合したのだろう。また他にもキューバは各地で音楽が影響を受け合い、新たなジャンルが生まれた。そもそもキューバ音楽のルーツは一つではなく、混交している。それらが自然な流れで人々の日常になくてはならないものとなり、現在まで受け継がれてきたのではないかと考えられる。ではサルサはどうかだろうか。

2. サルサという音楽

キューバ産の音楽であるソン、チャチャチャなどが革命後に亡命したキューバ人ミュージシャンと共にアメリカへわたつた。NYにはすでにジャズやアフロなど他の地域からきた音楽があふれていた。ソンやチャチャチャはそれらの音楽の影響を受けて「ジャズ風」にアレンジされたりするところから始まり、やがてそれらの音楽と混合してサルサとなつた。そうするとサルサはアメリカで形成された音楽ということになる。

二ユーロークもキューバ同様、移民社会である。

り、さらに多様な民族が住んでいることが関係しているのではないだろうか。

現在、ニューヨーク市の総人口は千九百二十五万四千六百三十人に對し、

・ヒスパニックは三百十万千六百二十人、

・アジア系米国人百三十八万二千九百九十九人、

・アフリカ系は二百五十一万五千七百九十二人がいる。(U.S.CensusBureauより)

雑多性があり、多種多様な音楽の寄せ集めであることはソンの形成に近いものがある。

だが、アメリカで音楽が成り立つ上でどうしても必要なのが商業主義である。NYでは音楽は人々が楽しむための商品であり、売れる商品でなければやつて行けないということは否定できない。

アメリカでは、「懐かしいケンタッキーの我が家」などで日本でもおなじみの作曲家スティーブン・フォスター（一九一六～六四）が音楽を楽譜や劇で使用するなど商品として売り込んだことがポピュラー音楽普及の始まりであった。音楽を提供して報酬を得るという商業スタイルが確立したのは彼の影響が大きい。そこから売れる音楽をもとめて多くのレコード会社が

ミュージシャンの発掘に奔走し、ヒット作品も生まれた。けれどそれ以外の圧倒的多数である

3. 「南京豆売り」からサルサへ

しかし、そんなキューバにも音楽の商業化

の波が押し寄せてきた。すでに一九三〇年代の「南京豆売り」でキューバ音楽は輸入され、ルンバというジャンルで世界的にヒットした。これからキューバに目をつけたアメリカ音楽業界は、その後ソン、チャチャチャなどのヒットさせることを画策した。キューバ革命後、六〇年代以降に多くのキューバ人ミュージシャンが亡命し、様々なレベルからレコードを出したことは先述にあるとおりだが、そこにはミュージシャンたちのある思惑があつたことがうかがえる。自分たちの商品価値に気づいたセリア・クルスなどのミュージシャンたちは「普通に働くよりも音楽をやつた方が稼げる」ことを知つた。事実、当時アメリカに亡命してきたキューバ人の多くは低賃金での労働に苦しんでいた。ミュージシャンたちはアメリカでキューバ音楽から売れるサルサの道を選んだ。もともと融合の音楽であつたソンやチャチャチャ、アバネー口などにさらに異なる音楽ジャンルとの混合をこころみた。アレンジなどでキューバ産音楽らしくしようとしても中途半端なまねになつてしまつたように思われる。

ここで言う融合とはキューバにおける融合とは異なる。キューバでは白人と黒人がお互いの文化を受け入れて自然な融合が生まれたが、アメリカでは受け入れて自然な融合が生まれたが、アメリカ

リカではマイノリティーであるラテン系のキューバ人が白人と対等な立場で音楽を受け入れられたわけではなかつた。たとえばジャズは黒人たちの反骨精神が秘められた音楽であつた。彼らは音楽が自分たちの誇りである。サルサは自分たちのルーツである音楽を自己主張するわけでもなく、アメリカに完全に溶け込もうとしているわけでもない微妙な混合で形成された音楽ではないだろうかと思う。

終わりに

同時にほかのレコード会社はキューバを離れたミュージシャンだけではなく、キューバ国内のミュージシャンについても販売ライセンスを取得してCD化し、売り出すようになつた。日本でも人気のロス・バンバンなどがそうである。しかしキューバでは外国人による音楽権利の売買が法律で禁じられているため、アメリカを始めとする外国レコード会社は表面上、CD

芽の出ない作品は消え、淘汰されて音楽産業が成り立ってきたという経緯がある。

サルサもより多くの人が親しみやすいように歌に流行を取り入れ、アレンジもソフトな歌謡曲風になつていったのだろう。それを「キューバン（キューバの）・サルサ」としてかたちだけをまねているものがキューバ音楽だと思われているのではないだろうか。キューバ人が商業をベースに考えたこのサルサを自分たちの音楽であるとは考えにくいだろう。金儲けになると、どうかは関係なく、純粹にキューバ音楽を受けている音楽好きなキューバ人からすると、サルサは自分たちとは異質なものと感じられるのかもしれない。サルサはソンに似ているようだが、違う曲調であることが多い。モントウーノの繰り返しのリズムがなくなりただの四拍子になつてしたり、アレンジでマラカスやクラーベスなどソンと同じ楽器を使用してキューバ音楽の雰囲気をだそうとしているように感じられる。厳密な比較はできないが、実際に音楽を聴いて考慮しても同じジャンルであるとは考えにくい。

歌に流行を取り入れ、アレンジもソフトな歌謡曲風になつていったのだろう。それを「キューバン（キューバの）・サルサ」としてかたちだけをまねているものがキューバ音楽だと思われているのではないだろうか。キューバ人が商業をベースに考えたこのサルサを自分たちの音楽であるとは考えにくいだろう。金儲けになると、どうかは関係なく、純粹にキューバ音楽を受けている音楽好きなキューバ人からすると、サルサは自分たちとは異質なものと感じられるのかもしれない。サルサはソンに似ているようだが、違う曲調であることが多い。モントウーノの繰り返しのリズムがなくなりただの四拍子になつてしたり、アレンジでマラカスやクラーベスなどソンと同じ楽器を使用してキューバ音楽の雰囲気をだそうとしているように感じられる。厳密な比較はできないが、実際に音楽を聴いて考慮しても同じジャンルであるとは考えにくい。

など。私もCDを聴いて音楽を楽しむ一消費者として、音楽が誰のためのものなのかを忘れないでいたいと思つ。

socialist cuba]
ROBIN D.MOORE 著

雑誌『月刊ラティーナ』1996年五月号
株式会社ラティーナ(1996年五月一日発行)

◆参考文献

〈書籍〉

- ・『ボビュラーオークルスの世紀』
中村 ひょうよう著
岩波新書 岩波書店(一九九九年)
- ・『サルサ ラテンアメリカの音楽物語』
スー・スチュワード著、星野 真理 訳
アスペクト社(1999年)
- ・『ブエナビスタソシアルクラブとキューバ音楽の手帖』
大須賀 猛編
水声社(1999年)
- ・『キューバを知るための五二章』
後藤 政子、樋口 聰 編著
明石書店(1999年)
- ・『ヒスピニックニアティーノ社会を知るための五五章』
大泉 光一、牛島 万 編著
明石書店(1999年)
- ・『全・世界音楽論』 東 琢磨 著
青土社(1999年)
- ・『MUSIC&REVOLUTION cultural change in

〈インターネット〉

- ・米国国勢調査(U.S.Census Bureau)
<http://www.census.gov/>
- ・ウイキペディア 日本版ホームページ
<http://ja.wikipedia.org/wiki/>
- ・ウイキペディア ラテン版ホームページ
<http://es.wikipedia.org/wiki/>
- ・社団法人 日本ラテン協会ホームページ
<http://www.riaj.or.jp/l900/>
- ・La Paginita chap.com
<http://www.chapu.com/site/cultura/origsalsa.html>
- ・スルエリ ハーマーク (ハーマークの歴史)
http://www.at-newyork.com/newyork-history/new_york_sources.htm